社会思想史学会・自由論題：報告と質疑応答の概要

　　石田雅樹「ジョン・デューイにおける「デモクラシーと教育」の変貌：市民性教育、社会改造主義、ソビエト・ロシア」

　報告：本報告は、第一にジョン・デューイ(John Dewey)における「デモクラシーと教育」の変容を辿ることで、その変容におけるジレンマを明らかにし、第二にそのジレンマを克服するものとしてソビエト・ロシア論に注目しその再評価を行った。すなわち『デモクラシーと教育』に代表される1910年代のデューイのデモクラシー論は、1930年代以降変質し「社会主義デモクラシー」socialist democracyへと向かうことになるが、後者では「教育」における「計画」の重要性が強まることで、場合によっては中央統制的な介入によって学校教育のデモクラシーが掘り崩されるジレンマを抱えることになった。本報告はこの後期デューイが「社会主義デモクラシー」に向かう中で陥ることになったジレンマを浮き彫りにした上で、それを克服する道筋を1928年のソビエト・ロシア訪問記の中に見出した。デューイは1930年代においてはソビエト・ロシアを「全体主義」として批判したが、それ以前のソビエト訪問時の見聞に際しては、ロシアの試みを高く評価しており、そこで「計画」と「デモクラシー」が調和した学校教育の姿を描き出していた。本報告では、従来注目されてこなかったデューイのソビエト訪問記を、「社会主義デモクラシー」における学校教育論のモデルとして読み解くことで、その意義を再評価し、これまでとは異なる可能性を提示した。

質疑と応答：本報告に対しては、主として以下のような質疑が行われた。

　第一に、先行研究の経緯をもう少し補足し、報告者が依拠しているR・ウェストブロックの位置を明らかにした上で、それとの差異を明示することで、本報告の意義を説明する必要があるのではないかという指摘があった。

　これに対し応答では、これまでのデューイ解釈の経緯を辿り、ウェストブロックの「リビジョニスト」としての位置とその重要性を補足説明した。またその上で、本報告はウェストブロックによっても十分に論じられてこなかった「デモクラシーと教育」の変容という論点を設定することでデューイのジレンマを明らかにしたこと、またそのジレンマを克服する道筋としてソビエト訪問記を位置づけたことに独自性が存在することを論じた。

　第二に、1928年のデューイのソビエト訪問記におけるその評価論と、1930年代におけるソビエト全体主義批判、その相異なる見解をどのように理解すべきなのかという質問が提起された。

　応答では、ソビエト評価／批判のどちらか一方が正しく重要であるというものではないこと、というのも、この対立するソビエト理解が、一般的なデューイ解釈、すなわちアメリカのリベラル・デモクラシーの再建者という解釈では見失われがちな視点を提示することを指摘した。つまりデューイのデモクラシーがラディカルであるのは、それが一方では「社会主義」とも結びつく可能性があり、また他方ではデモクラシー防衛のために「全体主義」とも対決するものであること、それを確認するためにも、この二つのソビエト理解が共に重要であると論じた。